

## 世界地図から消えた国

## ドイツ民主共和国 2

### 東ドイツの社会と反体制運動

中世以来の伝統をもつヨーロッパの都市では、その市街を囲む位置にかつては城壁が存在した。近代になってその外側に市街が拡大すると、交通の邪魔ということで取り払われ、代わりに幅広い環状道路が出現した。ライプツィヒも、その例外ではない。同じドイツ語圏のオーストリアの都、ウィーンと同様、人々はこれをリンク(Ring)と呼んでいる。

この街での国家保安省(STASI=シュタージ)の管理局は、このリンクがカーブしている所の角(Runden Ecke)にあった。89年秋のライプツィヒでのいわゆる月曜デモの行列は、まもなくこの建物をその行動目標にした。Runden Eckeこそ市民を絶えず監視し、その自由を圧殺して来た忌むべき存在だったからだ。その後、この建物は市民側に占拠され、今はその1階を使って STASI の隠された実態を暴露する展示施設になっている。

ライプツィヒ滞在中の一日、ここを訪れる機会があった。廊下には89年10月9日を最初の山場とする月曜デモの映像がビデオから流れていた。部屋に入ると目に飛び込んできたのは、マネキンの首にかつら、入れ歯と眉毛など変装用器具、それに携帯電話(トランシーバー然としたもの)など、諜報機関の性格を表す道具の一式だった。壁には、保安省大臣もちろん党政治局員でもあった、エーリヒ=ミールケの写真。彼の下に統制された組織の機構図、そして市民の郵便につい



ライプツィヒ旧市街と環状道路。右上に中央駅。中央左にバツハがいたトマス教会、右にニコライ教会。

ての検閲システムの図などが目についた。東ドイツ市民が国外に郵便を出す場合、すべては STASI の検閲に付された。さらに当局にマークされている者は、それが国内郵便であっても同様に検閲の対象となった。電話の盗聴も公然の秘密となっていた。思わず戦前の日本を思い出してしまった。

別の部屋には、もっと興味深い地図があった。それは市内の監視すべき対象にチェックを入れたもので、デモを組織していた反体制グループの拠点ニコライ教会はもとより、大学やその他公共施設、外国系商社のオフィス、そして外国人の滞在者がいる郊外の団地、私が滞在していた学生用の棟まで印がついていた。この STASI 管理局は、周辺の市町村にも諜報の網の目を広げていた。それは警察や軍、郵便や電話局と緊密な連絡を取り

合いながら活動していた。東ドイツに暮らす市民が、いかに鬱屈した生活を強いられていたかが、よく分かるものだった。

統一後に明らかにされた資料によると、STASIの職員は約10万人、情報提供を使命とする非公然職員がその他にやはり10万人、あわせて20万人近くもの大組織で、それはナチス第三帝国の情報機関をも凌駕するものだったという。43の部課に分けられ、対西ドイツ諜報活動に従事した「情報収集部」の他は、国内の不穏な動きや反体制活動を監視する役目をもっていた。STASIは、会社・学校・病院・体育団体・教会など、社会のあらゆる組織にスパイを送り込んでいた。しかも、一部の例外を除いてスパイには他の誰がスパイなのか分からない仕組みになっていた。二重にも三重にも、市民の相互監視の「目」があったと言ってよい。

監視が厳しかっただけではない。監視される人々が自由に活動したり、あるいは越境者とならぬよう、様々な制約を課し抑圧した。先の道路や鉄道網の不備も、財政的理由の他に、敢えてこうしたものの整備を怠った節がある。どんなに自家用乗用車への需要があっても、政府は西側に遅れるのを承知でその生産増と品質の向上にはほとんど手を付けなかった。80年代には、西側からコピー機が入って来たが、公的な機関への設置しか認められず、その使用は厳しく制限された。

西ドイツへの越境を試みた者など、国家体制に背を向けた人間が当局に拘束された場合、その者には過酷な運命が待っていた。例えば、親だけが越境に成功した場合、その見せしめとして子供を強制

的に他の里親に出して、家族の絆を引き裂くという不条理がまかり通った。書記長の妻で閣僚の1人だったマーゴット＝ホーネカーの指揮の下に行われたとして、統一後断罪された一件である。ソ連における「スターリン批判」を受けて、60年代にSEDに異を唱えたベルリンのフンボルト大学教授ロベルト＝ハーベマンのように、党を除名されただけでなくそのために職を解かれるという苦難を被った者もいる。彼はその社会的影響力ゆえ、82年に72歳で病没するまで、自宅軟禁を強いられた。

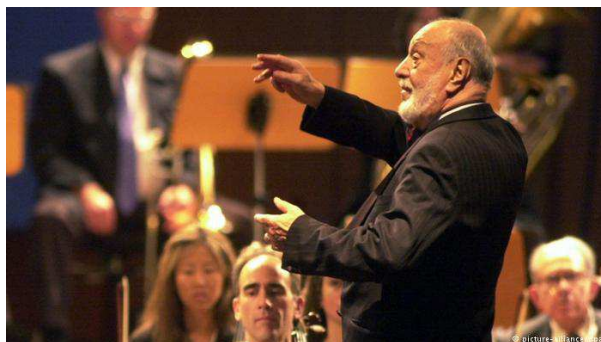
こうした社会体制に不満を持たぬ者が出ないわけがない。これほど抑圧的な体制の下でも、市民による改革への動きは80年代前半に東西欧州ともに反核運動が盛り上がり、それに名を借りて徐々に始まっていた。それは、当局による政治的不可侵が一応保障された教会(特にプロテスタント教会)を庇護の場としていた。ライプツィヒにおけるその中心もまた、ニコライ教会という旧市街に位置する福音主義の会堂だった。ここで



は、毎週月曜日に「平和の祈り」が催され、それは東ドイツの民主化を求める若い市民たちの政治集会の場となって行った。政治犯の釈放を求める祈祷会が行われていたのである。

89年に入ると、ニコライ教会を出た人々は街頭で沈黙の抗議行進を始める。そして、ハンガリー・オーストリア間の国境を越えて東ドイツ市民の大量脱出が続いたあの夏が過ぎると、9月25日月曜、ニコライ教会に集まった7000人の市民は集会後初めての公然デモに出発した。それが10月2日には25,000人に膨れ上がる。掲げられたプラカードには、「我々はこちらにとどまる！」「旅行の自由を！」※1などで、明らかに大量脱出者が提起している問題を意識してのものだった。東ドイツ市民は自分らの政府が造った「国境の壁」を、いつしか「心の壁」とし、その鬱屈した中で生きて来た。それがここへ来て爆発した形になったのである。

10月7日の建国40周年が表面上はつつがなく執り行われると、政府当局は9日月曜を前にして、「こちら側の全面降伏の前に、デモの拠点(すなわちニコライ教会)を叩くべきではないか」として1万5千人の保安警察隊を招集した。この時、老いたホーネカーがその前に話を聞こうとして、ライプツィヒのゲヴァントハウス交響楽団を率いていた指揮者のクルト=マズアと連絡を取ったという。※2 マズアはニコライ教会のグループに同情的であり、一方国民各層から尊敬される東ドイツの代表的な芸術家であった。彼の要請もあり、流血の事態は避けられたのである。



ゲヴァントハウス交響楽団、常任指揮者クルト=マズア

市民側でも、「暴力なし(Keine Gewalt=カイン・ゲヴァルト)」を掲げた。9日月曜デモに7万人、16日のそれに15万人、23日に30万人、30日にやはり30万人と、ライプツィヒのリンクはデモの群衆に埋め尽くされることになる。そしてこの動きは同じザクセンのドレスデンや首都である東ベルリンへと、全国に飛び火して行くことになった。彼らの力がベルリンの壁を突き動かし、同年秋の東ドイツの市民革命を平和裏に成功させる原動力となった。11月9日にベルリンの壁が解放された後、いち早く統一論議の火付け役になったのも、このライプツィヒ市民だった。彼らのスローガンは、「我々は一つの民族だ(Wir sind ein Volk)！」へと変わって行った。

※1「旅行の自由を！」というスローガンは、チェコ以外ヴィザ無しで旅行ができなかった東ドイツ市民にとって当然の要求だったが、ことに古くから独自の地方文化をもったザクセンの人々にとっては、その無類の旅行好きの性格が、国境によって阻まれているという「飢餓感」をより一層強めていたと言う(ヘルダー研究所のコシュベスキー女子の話)。

※2 マズア氏は久しく断っていた西側からの招聘を受けて、1991年よりニューヨーク・フィルハーモニーの常任指揮者も務めている。余談だが、マズア氏は日本

人の妻と暮らしていた。(2015年逝去)

## 統一後の旧東ドイツ地域の現在

1992年夏の欧州は、数百年来という記録的な熱波に襲われ、連日猛暑が続いていた。ライプツィヒの私は、その寄宿舎を市の西郊に広がる新興団地群の一角にあてがわれた。そこから毎朝市電に乗って都心の北部に位置するヘルダー研究所まで出かけることになった。開講式では所長のオットー氏が、「来る9月からは所員の1/3を解雇せねばならない」と窮状を訴えていた。急速に西ドイツ通貨のDM経済に呑み込まれた旧東ドイツ地域では、多くの企業や事業所が倒産や人員削減の憂き目に会い、失業者が増大していた。ここも例外ではなかった。

ドイツ語の講師はフンボルト大学出身のコシュベスキー女史、生徒は私以外すべてスペインからの学生で、他のクラスでも圧倒的多数を占めていた。DMには弱い通貨ペセタをもつ彼らにとって、安い授業料を設定していたここライプツィヒのヘルダー研究所はなかなか魅力的な場所だったのである。そう、旧東ドイツ地域では、未だに西より物価が安く抑えられていた。市電の運賃も50プフェニヒ(約40円)で、それは東ドイツ時代以来の補助金政策の名残と思われた。DRもDB(西ドイツ国鉄)とは別運賃で安く、私は研修の後半にこれを利用して何度か鉄道旅行をすることができた。

それでも、90年10月の統一以来、すでに2年が過ぎようとしていた。他の都市同様、通りの名も広場の名も、そしてカーン=マルクス大学の名も変わり、大学は

ライプツィヒ大学へと旧称に復していた。85年夏に一泊だけしたことのあるインター・ホテルのメルクーアも、来月には日本のセゾン系グループに身売りするという話が出ていた。リンクの中の国営デパートは解体し、ホルテンという名の西ドイツの百貨店に変わっていたし、かつての見本市会館にも開店したばかりのカーン=シュタット(西ドイツ最大手の百貨店)が入っていた。そこで売られる商品の9割5分位までが西側の商品であり、洗練されたディスプレイがしつらえてあった。



自身が滞在した郊外の団地の棟(03年に再訪し撮影)

時々、午後早くに帰って来て食料の買い出しに出かけたスーパーでも、事情は同じだった。統一後、こうした西側資本は逸早く東側に進出した。多くのスーパーが帆布を鉄の支柱で支えた仮設の大きなテントの中に店を構えていた。閑古鳥が鳴く国営のスーパーを買収する間も惜しんでの進出だった。乗りつける車の5台中4台までが、フォルクス=ワーゲンその他の西側の車だった。単純に考えて、自家用車の保有が5倍近くに増えたことになる。

実際、車が多くなり車両交通が増え、道路では東ドイツ時代には考えられなかった交通渋滞が頻繁に起こるようになった。急速なモータリゼーションの波は、交通事故の頻発を招いた。研修も後半に入ってから出かけたロシュトックからリュウゲン島への道では、1時間半の間に5件の追突事故に出くわした。道路は数珠つなぎだった。その分、鉄道はガラガラになり、かつてのような足の踏み場もないという列車の旅はあり得なくなっていた。一方で、統一ドイツ政府は、この道路や鉄道のインフラ整備のために多くの地点で改修工事を行っていた。そのため渋滞や列車の遅延もあった。こうして新政府が東ドイツ時代の「過少投資」のつけを払っていることは確かだった。東の「復興」に予想以上に時間がかかるのは、旅行者の目にも明らかだった。

東ドイツ時代、盛んに郊外の団地群が建設された一方、都市の内部での居住は極めて劣悪なまま放置され、伝統的な街並みを構成していたアパートには、住むことさえ危険なものも出て来ていた。旧国営放送のライブツィヒ放送協会に代わり新設された中部ドイツ放送協会(MDR)のテレビは、連日、中層のこうしたアパートが自然崩壊する事故を放映していた。それに遅れをとりながらも、西から派遣された首相をいただく新しい州政府は※3、街並み保存を含めた都市再開発に乗り出していた。都市の内部でも盛んに建設工事が行われており、バッハ縁の聖トマス教会もその対象になっていた。

私はこの年の春に出かけていたアメリカ南部のアトランタを思い出した。今で



聖トマス教会とバッハ(J.S.Bach)の銅像

こそ超高層ビルの建つその街も、南北戦争が終わった19世紀後半のいわゆる「リコンストラクション」の時代には、廃墟の中から復興を始めなければならなかった。小説『風と共に去りぬ』に描写されたそれである。街では北部からの資本家が幅をきかせ、南部人は彼らヤンキーに屈辱的な思いを抱いたという。旧東ドイツ地域は、再建途上という点でもそれを推進する西の人に東の人がコンプレックスをもつという点(敗者といった感覚か)でも、比較の対象になりそうだった。

8月23日の夜、その前日偶然私が旅行中に通過した北部の工業都市ロシュトックでは、難民施設に対する暴動が発生した。統一後、急速に台頭した右翼過激主義とソ連・東欧からの難民流入が、背景にあったと言われている。しかし、加わった青年の多くは失業中の身で、旧東ドイツ地域を覆う社会解体の病理を指摘する声も上がった。確かに7月末の失業率は、旧東ドイツ地域で軒並み10%を越えており、ロシュトックのあるメクレンブルク・フォアポンメルンでは、最悪の16.8%に達していた。この街の主産業で

ある造船業は、東側の顧客を失い、かつての人民所有企業の管財人の役目をもつ国家信託庁(トロイハント)から、清算の対象にされていた。

西ドイツの右翼政党は、統一を見越して「壁」開放の直後から東ドイツ入りして、活発なオルグ活動を展開していた。スターリン的な社会主義の失敗の反動からか、目標を失った青年たちを中心にこの勢力は急激に勢力を伸長した。実際、右翼に転じた青年たちには、SEDの下部組織とも言うべきFDJの活動家が多いという。彼らが見事な転向をはたしたことの説明として語られるのは、東ドイツ国家が上からの強制と命令の一元的な体制の下にあったこと。この体制に順応していたということは、秩序や序列を強調する権威的なパーソナリティーを備えていたのではと考えられること。だとすれば、イデオロギー的には正反対であっても、彼らこそ転向が容易な性格の持ち主だったのでは?と言うことだ。言論の自由のない「東ドイツには民主主義が育たなかった」※4とする説明とも軌を一にする。

統一前後から、ドイツには確かに多くの東欧難民がひたひたと入って来た。なかでもこの地でアジルと呼ばれるジブシー達は、都市部で昼間から「物乞い」をする始末で、毛嫌いの対象にされても仕方ない面もある。私自身、中央駅に近い、ホテル・シュタットライプツィヒ前の路上で、食べ物を買う金をくれと、中年の男性に付きまとわれたことがあった。言葉が達者ではなかったので、おそらくアジルの一員だったのであろう。しかし、暴動は主に旧東ドイツ地域で起こってい

るにも拘らず、流入し生活している外国人の人口比は、圧倒的に西ドイツ地域の方が高いのである。

「ロシア情勢」という無気味なかげもあるが、サッカー監督のフランツ=ベッケンバウアーが言うとおりの、「好戦的な右翼は一部の青年に過ぎず」、時間はかかるが「復興」が完成した時には、収束していくだろうと言う予想を信じたい。東の人は、確かに西にひけ目を感じている。語学の先生だったコシュベスキー女史は、私が旧東ドイツを意味する「DDR」という言葉を使った時、「そんな過去の事を言わないで」と言わんばかりに狼狽していた。また授業でレコードを聞かせてくれた時、蓄音機のようなプレーヤーを指して「東ドイツはこんな時代遅れのものしか作れなかった」と慨嘆していた。



女子陸上のベテラン選手 ハイケ=ドレクスラー

しかし、その西ドイツに吸収されてしまった国民の中にも、開会中のバルセロナ・オリンピックで金メダルを取り、黒赤金の三色旗(ドイツ国旗)に涙するハイケ=ドレクスラーのような選手もいた。この女子走り幅跳びの選手は、旧東ドイツのイエナ出身だったのである。どんな困難も、統一ができたという喜びには代えられないのであろう。

※3 新しいザクセン州の州首相には、西ドイツCDUのクルト=ビーデンコッフが就いている。旧東ドイツの再建にはこうした西出身の有力者が力を貸している例が多い。

※4 東ドイツで長く暮らした齊藤瑛子女史は、その著『世界地図から消えた国』の中で、東ドイツの良い点にも触れながらこう書いている。

「俺たちの意見が聞かれているわけじゃないもんな」

「どうせ、何を言っても無駄よ」

「民主主義？それは皆が勝手なことを言う衆愚政治のことだ」

「意見なんてない。振り回せば損ばかり」

「沈黙は金なり、さ」

「それにしても今日5件も回ったのに、ねじ回しが売っていない。誰か都合してくれないか」

「西ドイツマルク(DM)ならね！」

こんな風に関わられる飲み屋の会話が、東ドイツ国民の日常だった。と語っている。

## 終わりに

今私は、お気に入りのソファベッドを常用の寝床としている(万年床の有様)。もちろん、日本の家具屋で買ったのだが、何故かこれが東ドイツ製なのだ。いかにもドイツ製らしく、丈夫で長持ちといったイメージだ。しかし、1か所だけ気になる点がある。それはベッドとして引き出す際に使うキャスターの一部が、初めから壊れていたことだ。その他に問題点が少ないので、これは気になる。私は、東ドイツではこうした部品産業の品質管理が悪いのでは、と疑ってしまった。その後、東ドイツの実態が明らかにされると、やはりその産業政策の在り方と必ずしも無関係とは言えなかったのではと、思うようになった。

今回の東ドイツに関する論考では、その否定的な側面のみ取り上げたきらいがある。この国には制度として完全でなかったにせよ、社会保障制度が備わっていたし、女性が男性と同様に働ける社会環境があったのも事実である。だからと言って、以上見て来たマイナス面を払拭することはできないが・・・。

東ドイツについて何か書きたいと思ったのは、一つにはこの国が地図から消えてしまい、まさに消滅した国家だったということがあった。実際、私がいた92年夏のライプツィヒは、文字通りその後の「体制転換(資本主義化なのか?)の現場」だった。

もう一つは多分、自身を含めて「大枠での社会主義」に人類の未来を見ていた者にとって、この「失敗例」から何らかの教訓を引き出せないかということだった。スターリン的な集権国家としての東ドイツに最初から冷たい目を向けていたとは言え、こうした国の存在は我々西側の資本主義体制下にある者にとり、有益なアンティ・テーゼだろうと思っていた私にとって、東ドイツへの関心はある意味で当然の傾向だった。しかし、東ドイツの崩壊後、この国の「独裁による腐敗と腐朽」が様々な形で明らかにされたにも拘らず、左翼の人々の中には無関心を装うだけで教訓を引き出すこともしないでいる者もいる。そういうことに、一石を投じたかったのである。

時間をかけた割には突っ込んだ論考にはできなかった。またマルクス主義の、あの精緻なイデオロギーのどこに欠陥があったのかといった議論や、レーニズム

やスターリン主義の議論にまでは、自らが無知なこともあり、殆ど立ち入れなかった。その意味で、この文章は何かを発見すると言うよりこれまでにわかったことを私なりに確認するというものになった。

いずれにせよ、ドイツの東部地域は、今後もその復興と変化を、私なりに追ったいと思う……。

## その2 了

後日、参照文献欄をここに補う予定です。



現在のドイツの州別地図

右側のベルリンを含む6州が旧東ドイツ領だった。